

『宝髻所問經』における四念処観

加 藤 純 一 郎

1. はじめに

『宝髻所問經』 (*Ratnacūḍapariprcchā*)¹⁾ は、波羅蜜、菩提分法、神通成就、衆生の成熟、という四つの菩薩の淨行 (*caryāpariśuddhi*) について説く、綱要書の様相を呈した大乗經典である。これらのうち、内容の質、量から考えて、菩提分法の淨行は特に重要であり、中でも四念処の淨行に力点が置かれている。先行研究として高崎 [1974]²⁾ に本經典が取り上げられているが、今一度、初期仏教の四念処にまで遡り、本經における四念処観を考察してみる。

2. 四念処と四顛倒との関係

四念処は、身、受、心、法の四分野にわたって行われ、四顛倒の対治として不淨・苦・無常・無我という四想を心に思い浮かべる観想法であると言わされてきた。しかし、すでに指摘もあるように、阿含・ニカーヤにおいて、こうした四顛倒の対治としての四念処観を見出すことはできず、四顛倒の対治を本来、予想して説かれたものとは考えがたい³⁾。しかし、後代になると四念処は、四顛倒と密接に絡み合わされ始める。そのうち、經典として、最も古いものは、管見するところ、『陰持入經』⁴⁾ である。論書においては、『婆沙論』⁵⁾ の中にそれは見出せる。しかし、『婆沙論』においては「四念処=四顛倒の対治」という説に限られているわけではない。四念処は、四顛倒の他に四食、四識住、五蘊、四種不修、四修とパラレルに扱われている⁶⁾。『婆沙論』においては、四念処と四顛倒が関連づけられはしたが、いまだその結びつきは強固でないことがわかるのである。一方、『阿毘曇甘露味論』⁷⁾ は注目に値する。身念止は不淨觀を、受念止及び心念止は無常・苦・空・無我を、法念止は苦・無常を觀ずると示し、この理解は『婆沙論』とは異なっているのだが、本『宝髻所問經』における受念処とほぼ一致するのである。

3. 本經における四念処観

(1) 身念処

身念処では、身体の観察を二種の妙觀察 (*pratyavekṣaṇā) に分類し、不淨妙觀察において阿含・ニカーヤに見られるものと同様の不淨観を説いている。一方で淨妙觀察においては、この不淨の身体が「如来身、法身、無漏身」などを獲得することの観察を説く。さらに身念処の修習を無常と常の二種類に分類し、無常においては死に至る身体の無常を説く。ところが常なる分類においては、

菩薩は、自分の身体において一切衆生身と結びつく。・・・如来身が無漏であるように、そのように自分の身体の本質も觀察する⁸⁾。

と説く。ここでは、無漏身である如来身が自己の身体に重ね合わされており、さらにそれが一切衆生の身体にまで拡大されている。

(2) 受念処

ここでは、大悲と空性とが中心となって、受を無常、苦と觀察する方法が説かれている。その観察は、絶えず自他双方に向けられる。

一切衆生の受が滅しても自己の受のみは滅することはない。善男子よ、これが菩薩の受において受を觀する念処をよき方便と大悲とによって体得することである⁹⁾。

ニカーヤにおいて説かれた受念処は、あくまで苦を苦と見、樂を樂と見るといふ如実知見に限定されるものであり、他への慈悲を中心に据えての本經の解釈は、まったく新しいものである。さらに注目されることに、ここに説かれた受念処における無常・苦・無我・寂靜の観察は、先に述べた『甘露味論』と一致する点である。本經に説く「寂靜」は、最後に「空性」によって受念処がまとめられている点からも空であることは明らかである。

(3) 心念処

ここでは、心の本性が、無差別、平等であり無戲論なものであることを述べる。また、心性明淨が説かれ、さらに「自心の平等性によって一切衆生の平等性を知る。・・・一切法の平等性により菩提の平等性を知る」¹⁰⁾と説いている。

(4) 法念処

法念処では、中道の理解を軸とし、一切法の無差別、さらに衆生界と法界との本来の同一を最終的な主題として説いている。ここでは、減ることもなく増えることもないという中道、そして、法界の無差別からすべては一界に帰することがその中心である¹¹⁾。一界あるいは不増不減という理念は、如來藏思想にとって欠

かせぬ要素であり、『不增不減經』に先行する本經においてこうした要素が出ていることは、まことに興味深い。

また、上に記した四念処の説明の後、本經は、この説を四顛倒と結びつける記述を付加する。しかし、この記述は、四念処の説明全体の中に据えたとき、落ち着きが悪く二次的に付加されたものではないかと疑われる。実は、この四顛倒の形態は、先述した『婆沙論』における四顛倒の形態とほぼ一致する。『婆沙論』においても、四念処と四顛倒の結びつきは必ずしも堅固なものではなかった。

4. 結論

まず、教義として、本經の四念処観は、初期經典の思想を要約しながら取り込んでいる点に注意をしなければならない。しかも、受念処においては『阿毘曇甘露味論』との興味深い一致までが確認され、さらに、『婆沙論』との類似性も指摘される。とすれば、本經の四念処観は、その發展の過程において、明らかに部派との連續性を有していることがわかる。さらに注目すべきは、この早い時期の經典に、すでに高崎 [1974] で言われる如來藏思想の基本的な要素が出ていていることである。本經は、部派との連續性を有しているにもかかわらず如來藏思想がうかがえる方向に發展しているのである。

- 1) Peking (P) No. 760T204a1-257a8 Narthang (N) Vol. 46No. 79Cha349a4-419a6 StogPalace (S) Vol. 40Cha333b4-400a5 Kawaguchi Collection (T) Vol. 56-12No. 33-46Cha280a8-336a1
- 2) 高崎直道 [1974] 『如來藏思想の形成』 pp. 691-695, pp. 718-732
- 3) 下田正弘 [1985] 四念処における不淨觀の問題、『印仏研』 33-2, 545-546
- 4) 『陰持入經』卷上 (T. No. 603 175c17-20)
- 5) 『阿毘達磨大毘婆沙論』卷第187 (T. No. 1545 938a13-18)
- 6) 『同』卷第187 (T. No. 1545 938a18-b5)
- 7) 『阿毘曇甘露味論』卷下 (T. No. 1553 977a29-b10)
- 8) (P) 221b3-4 (N) 372b4-6 (S) 355b2-3 (T) 300b5-7
- 9) (P) 223b1-2 (N) 374b7-375a2 (S) 357b5-7 (T) 302b3-4
- 10) (P) 225b4-5 (N) 377b4-5 (S) 360a7-360b1 (T) 304b6-7
- 11) (P) 227b4-228a6 (N) 380a6-381a2 (S) 362b5-363b1 (T) 306b6-307a8

〈キーワード〉 『宝髻所問經』、四念処、如來藏

(東京大学大学院)